第六版（日刊）　昭和十八年八月六日（金曜日）　中國新聞　（明治廿五年五月四日第三種郵便物認可）　第一万七千六百七十三号（一）

市呉 188.6 原

中國新聞
発行所 広島市上流川町二番地
中國新聞社
電話 本社(中)三八六一 編集三八六一 振替口座 広島五〇〇番
印刷人 田中幹吉

敵機廿五を撃墜

ムンダ上空で空中戰

大本營發表（八月五日十五時三十分）帝國海軍航空部隊は八月四日ムンダ上空において敵戰闘機およそ七十機と交戰し、その二十五機を撃墜せり、わが方の損害四機

三十日のレンドバ島上陸以來、わが前衛基地たるニューヂョーヂア島に對して毎日目覚ましく繰拡に來襲、その都度わが熾烈なる砲火によつて、あるひは果敢なる空中戰によつて撃退されつゝある、今回大本營發表の如く敵は四日午後ムンダ上空に來襲、グラマン・ヴォートシコルスキー、ベルP39、カーチスP40などの新鋭戰闘機七十機をもつて小隊にもムンダ上空に來襲したのであるが、かねて執拗きはまる敵の常套手段を看破し敵必滅の信念に燃えるわが海軍は一齊に襲撃つてこれを邀撃、彼我入乱れての壮烈なる巴戰を演じた結果、その二十五機を（グラマン十二機、ヴォートシコルスキー八機、カーチスP40二機、ベルP39二機）を見事に撃墜、他を撃退したのであつた、この戰闘において敵機は七十機といふわれに倍する多數を擁し、戰を試みたにもかかはらずいざ空中戰となるやその半數に近い三十二機のみがわれに反向ひ、他は戰はさるにすでに戰意を喪失して遁走するなどわが精強なる海軍の鬼戰ぶりに恐れ戰ふ有様で浮足立つた編隊ぶりを如實に示したのである、この戰闘經過を見ても容易に首肯される如く敵はわれに倍する數を擁しながら戰意、技倆ともに遥かに劣ることを暴露、わが方は量においてこそ敵と等しくあるとはいへ戰意、技倆ともにアメリカ軍を壊滅的に凌駕しつゝあることを示したのである、少くとも彼我均等の數量なれば本日の戰闘に見られるやうに敵の大打撃を敵に與へる自信と確信とは不動かぬまで前線の海鷲の胸に固く刻まれてあるのであつて、われら一億國民は現在銃後の責務たる航空機増産に一層の拍車をかけねばならぬ

ニューヂョーヂア島ムンダをめぐ「敵ならびに補給路」戰闘と相俟つて「彼我なる航空兵力の戰を唯一の武器」日毎に「壮烈の度を加へつゝあり、「器」と等す敵アメリカ軍はさる六月

敵の戰意技倆低劣

應戰わづか三十機のみ

ソロモン海戰一周年

大東亞戰の歸趨決する

悽愴苛烈、現戰局の様相

報道班員に訊く

緒戰における戰闘から必死となつて立ちもどろうと焦慮した敵米英がはじめて本格的な反攻を示したのは昨年八月七日の第一次ソロモン海戰であつた、その後今日まで幾多の海戰、航空戰がソロモン群島を繞る地域に繰り返されつゝソロモン海戰一周年を迎へようとする、しかも戰闘は刻一刻と無氣味な濃度を増し、南溟の空を蔽ひ彼我の決戰は日一日と熾烈の度を加ふるとき、われらの銃後を衝く海戰一周年を迎へる感慨いよいよ強固たるを覺ゆる、このときにあたり本紙は第一次ソロモン海戰以來身を挺して戰ふ海軍部隊に從軍、戰隊作戰、航空作戰あるひは輸送作戰などを具さに體驗して最近帰國した中村、北原、飯塚の三海軍報道班員ならびにガ島帰還者で彼の地へ踏み止まつて前線將兵と生死をともにした香中同盟特派員の福氏にソロモン群島海戰一ケ年の様相と今後の決戰方向などを訊いた

ソロモン海戰の教訓

ソロモン海戰の動機は敵戰に優る敵アメリカが飛行場の島嶼打開に乘出し支那奥地よりするわが本土空襲、北方進攻路の反攻作成、ギルバート諸島への反撃などが脆くも挫折したのと時を同じうしてソロモン群島南端ツラギ海戰附近へ輸送船團を襲撃したアメリカ、イギリス大部隊の出撃したことによつて口火を切つたのである、敵はわが占領下にあるツラギおよびガダルカナルを一挙奪回せんとして無謀の反撃を試み、われはこの敵を撃滅してこゝにソロモン海戰の凄絶な進展を見るにいたつたのである、以來今日まで主なる海戰、航空戰のみでも第一次、第二次ソロモン海戰、南太平洋海戰、第三次ソロモン海戰から最近のクラ灣夜戰、コロンバンガラ島沖夜戰まで實に十指にあまり、この間わが方が西南太平洋方面で收めた戰果は撃墜機、空母、巡洋艦、驅逐艦、他の艦艇沈没百五十隻、撃破五十隻、船舶撃沈六十隻、撃破二十隻、飛行機の撃墜破にいたつては三千機に亜々としてゐる、しかしわが方の殊い犠牲もまた第三次ソロモン海戰における戰艦霧島、撃破二十隻、大中破三十隻、船舶の沈没大中破合せておよそ四十隻、飛行機の自爆未帰還大中破合しておよそ七百機を算し、この方面における苛烈なる決戰様相を遺憾なく物語つてゐる（以上の數字はいづれも概算數である）しかしてソロモン水域に戰はれた決戰は今日まで大體次の四つの段階に別けてみることが出來よう、すなはち

第一段階 は昨年八月七日の第一次ソロモン海戰から十一月三十日のルンガ沖海戰にいたる敵護衛艦隊とわが艦隊とのもつとも華々しい艦隊決戰

第二段階 は昨年十二月から本年二月初旬のガダルカナル島撤退までの彼我基地漸進作戰の展開

第三段階 は撤退以後六月三十日のレンドバ作戰直前のいはゆる航空決戰による敵の熾烈極まる反攻作戰

第四段階 は六月末の敵上陸作戰以降すなはちソロモン戰局中もつとも優憂苛烈を極める基地爭奪戰に入り、敵はわれに數倍數十倍する大兵力を繰り出し、わが最前線基地ムンダと指呼の間にあるレンドバ島に上陸し、さらにルビアナにも上陸、南北からの挟撃戦を試み、こゝに同方面の現戰は大東亞戰開始以來最大の反攻作戰として注目されるにいたつた

要するに第一次ソロモン海戰以來敵艦作戰に警戒に値する大なる生産力を背後にひかへて航空戰によつて決戰を挑むにいたる一ケ年間の戰局を概觀してみるならば、われわれは敵の反攻がいかに組織的ならびに計畫的に行はれ、かつその戰略も並々ならぬ執拗頑強さをもつて戰はれてゐることを知る

航空決戰補給路遮斷

しかるに現戰爭の主流をなすものはなにかといへば彼我一致、航空戰をもつてする戰略の反復である、大體敵は日本に對する作戰の根本方針を戰艦中心の軍形戰においてゐたのであるが開戰劈頭のハワイ襲撃から數次の海戰で片つ端しから叩き潰され、これに代る航空母艦もまた同様の運命を辿るにいたつた、そこで敵は絶對に沈まない航空母艦、すなはち陸の基地を有する基地航空隊の整備に傾倒し、いろ〳〵の理由を用ふることに方向を轉換した、基地航空隊が他の航空兵力たとへ航空母艦に比べてその威力は絶對的であることはこれまでの幾多海戰の實例に徴しても明かである、もちろん基地は沈まない點が特長ではあるけれども移動性がない一度襲撃を受けた場合自己の所有する航空機を守る術なく、これに反し空母は移動性を有しこれによつて搭乗員を安全に守り得る、それぞれ一長一短があるが、いづれにせよ、優大なる攻勢力を持つ基地網を整備することは海戰の運命を決定づけることである、そこで現在の航空決戰は各戰線の基地から飛出した航空機が日夜鬱えざる死闘をつづけてゐるが、この決戰は敵に航空兵力を撃滅する遠近各例で、たとへば何機のうち何機を撃墜したといふ上空戰闘における撃墜機數の問題ではなく、航空決戰の目的はやはり相互の輸送線、補給路遮斷を第一目標とするものである、結局基地を維持するためには後方輸送線を確保せねばならぬし、その輸送線を奪ふ洋上の制海、制空權がなければならぬ、撃墜されても後からもつて來る敵の執拗な反攻振りを見ることによつてこの輸送線の問題は判然たるであらう、わが海軍航空部隊が前面の敵をたゝくと同時に、はるか後方の敵輸送船團の攻撃をもひるまず繰返してゐる勇戦のほどが偲べるであらう、したがつてこれからの戰爭はいはゆる基地航空戰と同時に補給路遮斷の決戰であり、この反戰は全く國の生産能力の問題にかゝつて來つゝあるが、言を換へていへば生産力が眞先に敵と鍔競合ふのが航空決戰であり、ソロモンの航空決戰はわが日本の銃後と敵米英のそれぞれの生産力が鎬を削つてゐる戰場だと謂ひ得るのである

量と質との問題

敵はハワイを中心に南太平洋の島嶼ひに次から次へと飛行機を運んで來つつある、しかも全部空輸であるから足の長いものはの必要で從つて量の問題も解決されるが、ここで注意せねばならぬことは『もうだめだ！』といふことに通ずる、それで敵の戰闘機なり爆撃機なりがこの新鋭機に出遭ふと瞬間的になんともへぬ恐怖に襲はれるといふ、排撃になつた欧洲人が、ボーイング搭乗員の告白では攻撃に出發するときは必ず『新鋭戰闘機に遭つたら速かに遁避すべし』と訓示されたとのことである、また『いかにして新鋭戰闘機を攻撃すべきや』といふわが海軍戰闘機に對する攻撃方法を研究したパンフレットがアメリカ搭乗員に渡されてゐた、しかしてこのパンフレットもわが方の專門家が讀んで見たところ全くの彼らの恐怖を置するための氣休めに過ぎずと断定してゐるから表面とはおよそ似もないものであるらしい、敵味方とも相手機の攻撃方法に想像以上に研究されてゐると見ねばなるまい、戰闘機を例にとつても日本人は先天的に戰闘機搭乗にすぐれてゐるといはれることは日戰における優勝さ不敗の戰闘見戰は並ぶものがないが、だといつてこちらの數機にたいし向ふが二十機三十機と數を恃んで來る場合にはいかに優秀な機と人といへども勝利の公算は敵み難い、本年五、六月ごろからは航空決戰が今までにない大規模のもとに戰はれ、百五十機、二百機といふ大編隊の空戰に入りつゝある、かくなれば戰に質のみでない、量の問題も當然眞剣に考へられねばならぬ、特に敵側が臨時ひに敵易空機法を採用し、乗々と開給を行つてゐる實情においては航空機の増强と搭乗員の養成といふことが絶對不可缺の必勝條件となつてくるのである

總力を戰爭へ集中

ウイチット答禮使聲明

ウイチット泰國外相記者團と會見

（於帝國ホテル＝電発）

滯京中の泰國答禮使節ウイチット外相は去月午後三時帝國ホテルにおいて記者團と會見、今回の來朝に際しての次のやうな聲明書を發表、泰國民は軍實によつて示されるわが共榮圏の建設に對して衷心より感謝、日本とともにその軍事、政治、經濟、文化の總力を集中、大東亞戰爭の完勝に邁進する決意を堅持する旨を表明、多大の感銘を與へた

私の今回の旅行の目的は大東亞戰爭に入つたものなることを明白ならしめ來られたのである、大東亞戰爭勃發する前において泰國民は軍實によつて示されるわが共榮圏の建設に對して衷心より感謝、日本とともにその軍事、政治、經濟、文化の總力を集中、大東亞戰爭の完勝に邁進する決意を堅持する旨を表明、多大の感銘を與へた

私の今回の旅行の目的は大東亞戰爭に入つたものなることを明白ならしめ來られたのである、大東亞戰爭勃發する前において泰國民は軍實によつて示されるわが共榮圏の建設に對して衷心より感謝、日本とともにその軍事、政治、經濟、文化の總力を集中、大東亞戰爭の完勝に邁進する決意を堅持する旨を表明、多大の感銘を與へた

ウイチット外相は去月午後三時帝國ホテルにおいて記者團と會見、今回の來朝に際しての次のやうな聲明書を發表、泰國民は軍實によつて示されるわが共榮圏の建設に對して衷心より感謝、日本とともにその軍事、政治、經濟、文化の總力を集中、大東亞戰爭の完勝に邁進する決意を堅持する旨を表明、多大の感銘を與へた

私の今回の旅行の目的は大東亞戰爭に入つたものなることを明白ならしめ來られたのである、大東亞戰爭勃發する前において